



▲2012年6月、郡山市で行われた復興応援コンサート。

女性は若い頃から苦勞をされていて、震災時は、ご主人とサンダルひとつで避難所に逃げたそうです。家は土台以外全部流されてしまい、自分の人生はなんてついでないんだろうと思われたとか。それから仮設住宅に移り住んで、近所の人が家

族みんな流されてしまった話や、自分だけが生き残ってしまったという話を聞き、『私は父ちゃんと2人生き残らせてもらって、なんてありがてえなんだ。そして仮設住宅に暮らしているといろんな人とふれあうことができる。だから私は生まれてはじめてそこで人と人のふれあいを感じて、初めて幸せを感じたんだ』と笑顔で話してくださったんです。そんな笑顔の方がこのようなお話をされるとは思わなかったし、震災後に何もかも失ってしまった中で一番の幸せを感じられていることが、自分の中では衝撃的でした。そのときに「人の一番の幸せは人と人とのふれあいである」こと、「人は笑顔の裏にいろんな人生を抱えて生きている」こと、その2つを学びました。人と接していく中で相手をどう見つめていくべきなのか、その道標を持たせてくれたような出会いでした」



▲復興応援コンサートでは、福島の大小様々な会場を巡りました。

今、何をすべきかの見極めが大切です

「震災以前も、山口県内の福祉施設などに訪問するボランティアをしたことはあ

りましたが、大規模で交通費など全てを自費で行うのは復興コンサートが初めてでした。その中で、ボランティア活動の難しさやあり方を学び、人の心の移り変わりも目の当たりにしてきました。とにかく被災地の人の思いを受け止めたいとスタートした復興コンサートが、2・3年目になると、「自分たちが忘れられてしまっている被災者の方へ『私たちは忘れてないよ、また今年も来たよ』と再会を喜び絆を深めるものになりました。4・5年目は復興が進み環境がどんどん変化していく中で、熊本地震が起こりました。そのとき行っていたコンサート後、福島の方々が『自分たちはいつまでも被災者じゃいられない。ちひろさん、今度は熊本・大分に行つてあげて元気づけてほしい』と見送つてくれたんです。現場の変化に応じてどんなボランティアが必要なのかアンテナを張つて、それを考えて寄り添って進んでいくのがすごく大切だなと思っています。『ちひろさんが来てくれる一年がんばれる』と言ってもらえて、継続する大



▲復興応援コンサート後、地元の方々との交流の様子。

切さも感じましたが、いろんな状況が変わってきた中で引くことも大事だということも実感しました。ボランティアで行ったコンサートは5年目を区切りに終えましたが、郡山市に『鈴と小鳥の会』という団体が発足して、6年目からはそこが主催となって逆に私を招待してくれるようになったんです。それもまた復興への大きな一歩だったと感じているので、これからは同士のようなかたちで共に歩んでいきたいと思っています」

「みんな違ってみんないい」を胸に

「コープさんが大切にしていることの1つは、『一人ひとりの生活に寄り添うこと』だと思っています。私もコンサートや歌が一人ひとりの日常生活に寄り添い、元気を与えるものであってほしいと思っているので、気持ちはコープさんと同じです。一人ひとりみんな違うからこそ、助け合える。違いがあるから、みんなが一緒に生きることができると思います。違いを持つてうまれてくるのが当たり前、違いをわかちあうことも当たり前…。まさに、『みんな違ってみんないい』ですね」

「コープやまぐちでは、これからもちひろさんの思いと同じく、人と人とのつながりを大切に、一人ひとりに寄り添った活動を継続していきます。」